

本展にて展示する作品をご紹介します

「^{ろうそく}赤い蠟燭と人魚」 小川未明 著

わが子の幸せを願った母親により、神社の石段の下で生み落とされた人魚の娘。蠟燭屋を営む老夫婦に拾われた娘は、大きくなると蠟燭の絵付けをはじめて評判になりました。その噂を聞いた香具師は、人魚は不吉だと老夫婦を脅し、娘を手に入れます。真っ赤な蠟燭を残し、連れ去られていった娘でしたが、数年後にその町は…。

「^{ばん}伴先生」 吉屋信子 著

女手一つで育ててくれた母を亡くした伴三千代は、女学校を卒業後、教師として東北の学校に赴任することになります。道中で捨て子と出会った伴は、彼女を見捨てられず、自らの手で育てることを決意します。

「^{あしかり}芦刈」 谷崎潤一郎 著

1932年に発表された「芦刈」は、谷崎46歳の時の作品です。神戸に住む主人公は、水無瀬離宮の跡をたずね歩くうちにふしぎな男と出会います。男の話す昔話に思わず引き込まれる主人公でしたが、話が終わると男はふっと姿を消してしまいました。

「^{しょうぞう}ドリアン・グレイの肖像」 オスカー・ワイルド 著

美青年ドリアン・グレイは、友人の描いた自身の肖像画を見て、絵の方が歳を取ればいいのにと願います。その願いが叶い、永遠の若さを手に入れたドリアン・グレイでしたが……

「^{かて}地の糧」 アンドレ・ジッド 著

「地の糧」は、語り手である主人公が、ナタナエルという名の青年に語りかけるという形式で書かれた物語です。

主な参考文献

『増補改訂 新潮世界文学辞典』江川卓ほか/編 新潮社 1990年
『オスカー・ワイルド事典－イギリス世紀末大百科－』山田勝/編 北星堂書店 1997年
『作家の自伝 66 吉屋信子－投書時代/逞しき童女－』佐伯彰一・松本健一/監 日本図書センター 1998年
『オスカー・ワイルドの生涯－愛と美の殉教者－』山田勝/著 日本放送出版協会 1999年
『絵本の事典』中川素子/ほか編 朝倉書店 2011年
『谷崎潤一郎－文豪に会おう 企画展－』山梨県立文学館/編 山梨県立文学館 2014年
『子どもに伝えたい和の技術 5 あかり』和の技術を知る会/著 文溪堂 2016年
『大正ガールズコレクション－女生徒・令嬢・モダンガールの生態－』石川桂子/著 河出書房新社 2022年
「上越市 ホームページ」<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimei-bungakukan/>
「国立国会図書館 国際子ども図書館 ホームページ」<https://www.kodomo.go.jp/jcl/person/ogawa.html>

大西民子 (1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で遼空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994年死去、享年69。



2025年9月3日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701 FAX 048-648-8460

歌人・大西民子の

身近なものがたり

2025年9月3日(水)～11月12日(水)

No.	種 別	内 容
1	自筆原稿	エッセイ 「随想二章 童話」 「短歌研究」 1983年3月号掲載
2	書籍	『赤いろうそくと人魚』 小川未明 文 朝倉撰 絵 1970年刊行・初版 講談社
3	書籍	『印度の果実』 大西民子 著 1986年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌 「家づとに絵蠟燭買ひバス待てば何かかなしみを持ちたる如し」
4	自筆原稿	エッセイ 「私のなかの本棚 傾国の笑み」 「形成」 1978年7月号掲載
5	書籍	『伴先生』 吉屋信子 著 2003年刊行・初版 国書刊行会
6	自筆原稿	「上京せむ決意のゆらぐ日もありき明るく生徒らに取り巻かれつつ」
7	雑誌	「短歌」 1989年1月号 掲載エッセイ 「わが青春の愛読書 「月と狂言師」まで」
8	書籍	『吉野葛・芦刈』 谷崎潤一郎 著 1950年刊行・初版 岩波書店
9	雑誌	「短歌研究」 1968年6月号 掲載エッセイ 「師弟の対話」
10	雑誌	「形成」 1965年11月号 掲載エッセイ 「或る対話から」
11	雑誌	「国文学 解釈と教材の研究」 1993年12月号
12	書籍	『初昔 きのふけふ』 谷崎潤一郎 著 1943年刊行・初版 創元社
13	自筆原稿	「泥みつつ何時までか思ふ獄を出でて遂に再起し得ざりしワイルド」
14	書籍	『光たばねて』 大西民子 著 1998年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌 「身体が変はると思ふ日なりしか「ドリアン・グレイの肖像」読みて」
15	書籍	『ドリアン・グレイの肖像』 オスカー・ワイルド 著 2019年刊行・初版 岩波書店
16	自筆色紙	「日のくれに帰れる犬の身顫ひて遠き沙漠の砂撒き散らす」
17	自筆原稿（コピー）	エッセイ 「わが歌の秘密」 「短歌」 1973年10月号掲載
18	書籍	『地の糧・新しき糧 ジイド全集Ⅱ』 アンドレ・ジッド 著 1950年刊行・初版 新潮社
19	書籍	復刻版 「赤い鳥」 1巻2号 赤い鳥社 編 1918年刊行・初版 赤い鳥社
20	書籍	復刻版 「女子文壇」 第一巻第一号 （復刻 日本の雑誌 D） 日本近代文学館 編 1987年刊行 講談社 復刻版 「令女界」 第一巻第一号創刊号 （復刻 日本の雑誌 F） 日本近代文学館 編 1987年刊行 講談社 復刻版 「新女苑」 創刊号 （復刻 日本の雑誌 G） 日本近代文学館 編 1987年刊行 講談社

資料 No.2 『赤いろうそくと人魚』は大宮西部図書館、その他はすべて大宮図書館所蔵です

1 子供のころの読書体験

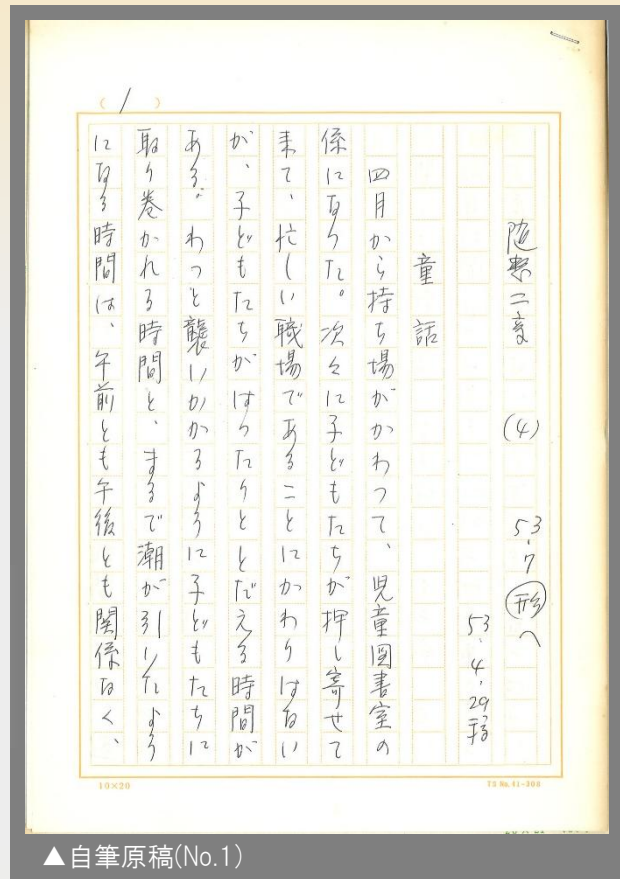
大西(旧姓:菅野)民子は幼い時から読書好きで、様々な本に親しんできました。中でも、懐かしい作品としてあげているのが、小川未明の童話「赤い蠟燭と人魚」です。9歳年上の姉・サトにこの話を読み聞かせしてもらった民子は、人魚が香具師(見世物などで儲ける商売人)に連れ去られる場面で毎回泣いてしまうため、姉を困らせていたようです。民子は自身のエッセイにて、

幼い日にこの童話を好んだのは、悲しいからであり、美しいからであった。そしてそれだけで充分であった。

エッセイ「随想二章 童話」より (No.1)

と書いています。

また、吉屋信子の小説『伴先生』は、民子が教職の道へ進むことを決めたきっかけとなった作品です。主人公の教師・伴三千代の生き方に感銘を受けた民子は、自らも教員となるべく奈良女子高等師範学校に進学。卒業後は、岩手県釜石市の学校で熱意を持って働くことになります。



▲自筆原稿(No.1)

2 民子と谷崎文学

奈良女子高等師範学校4年生になった民子たちは、卒業論文の代わりに近代作家研究の発表をすることになります。その際、民子は好んで読んでいた谷崎潤一郎をテーマにすることにしました。特に、日本古典を題材にした『芦刈』や『盲目物語』などが好きで、作品の舞台を訪れたり、寮では消灯した後も懐中電灯を片手に作品を読んだりと熱中していたそうです。

また、1956年に第1歌集『まぼろしの椅子』を出版した後、スランプに陥ってしまった民子は、短歌の師である木俣修から小説をたくさん読むようにとアドバイスを受けます。改めて谷崎作品などを読み返した民子は次のように語っています。

——私はこの時の読書によって、現実の世界のほかにもう一つの世界があること、つまり、書くことによって始めて存在する真実の世界、芸術の世界のあることを知ったと言えるだろう
エッセイ「師弟の対話」より (No.9)



▲写真「谷崎潤一郎」
出典：国立国会図書館
「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

民子のエッセイ “わが青春の愛読書 「月と狂言師」まで”

「短歌」1989年1月号掲載

そのころ奈良女高師では、卒業論文はなかったが、その代り四年生のときに、近代作家研究の発表をすることになっていた。(中略)昭和十七、八年、太平洋戦争も末期に近く、国民精神総動員、などと叫ばれ、「谷崎が好き」と大声では言えないような世の中であつたが、幸いに奈良は戦禍を免れ、静謐を保っていた。

(中略)殊に私を魅了したのは「芦刈」で、月下の水無瀬川の城址にさまよい出た行者が、そこに現れた幻の人から、その父を中心とした愛情物語を聞く。幻としてでなければ、全的には受け入れ難いような没我的な愛は、ついには神韻縹渺の世界に読者を引き込む。或る秋の一日、地図をたどって水無瀬離宮の跡をたずね歩いた私は、帰る道を失うほど、水のほとりの芦の中に迷い込んだりした。

(中略)「盲目物語」「春琴抄」など、寄宿舍の暗い灯のもとで読んだ。消灯後も読み続けたくて、押し入れの中に懐中電灯を持ち込んだりした。まだ十八や十九の少女、何ほどの真価に触れ得たかはわからないが、夢中な読書であったことは懐かしい思い出である。そして関連づけて、ワイルドやジイド*まで、手の届く限り読みあさった。(後略)



▲写真「奈良女子高等師範学校時代の民子」
後列、中央が大西民子。

* アンドレ・ジッドのこと

3 民子と西洋文学

民子は日本人作家の作品だけでなく、海外文学にも興味を持っていました。なかでも、オスカー・ワイルドと、アンドレ・ジッドの作品に特に親しんでいたそうです。

身体が変はると思ふ日なりしか「ドリアン・グレイの肖像」読みて
(No.14)

若い頃からワイルドの作品『ドリアン・グレイの肖像』を愛読していた民子は、主人公・ドリアンのように自分の姿も変わるような感覚を抱いたのでしょ。その印象を晩年まで忘れることはなかったようです。

日のくれに帰れる犬の身顫ひて遠き沙漠の砂撒き散らす
(No.16)

ジッドの作品では、民子は『地の糧』が特に好きだったそうです。No.16の短歌にある「遠き沙漠」とは、『地の糧』に登場するアルジェリアの沙漠を思い起こしているのでしょうか。



▲写真「愛犬ローリエ」
民子が飼っていたミックス犬。「日のくれに帰れる犬の身顫ひて遠き沙漠の砂撒き散らす」(No.16)の歌は、散歩から帰ってきた愛犬の姿にヒントを得て詠んだものです。